

を克明に描き出している。また、第二章では、血液循環の受容史について、「ハーヴェイの血液循環論とその受容」の節にまとめられている。

第三章「III 疾病概念の変遷」は、新たな疾病概念の誕生と消滅について、疾病解釈の違いや周辺領域における研究発展の影響などによる概念変化として「先天代謝異常の概念の歴史」と「Archibald Garrodのパラダイム」の節にまとめられている。これを受けて、氏の臨床経験より導かれた「新生児黄疸と体質性黄疸」についても考察が加えられている。さらに、病名の変遷と命名について検討したのが「背番号病—病名の変遷を中心に」、「発疹性感染症にみる病名の由来」、「文学作品に由来する2,3の病名」の節である。

第四章「IV 小児疾患の診断と治療」は、「診断学」と「探偵学」との対比において論じられた「シャーロック・ホームズのモデル ジョゼフ・ベル教授と診断学の周辺」、今日の科学的検尿法に至る変遷を検討した「視尿術から科学的検尿法まで」、下痢症における輸液療法の歩みとリンゲル液の完成過程等について叙述した「輸液療法のあゆみ」の三節から構成されている。

第五章「V 小児科学の誕生と小児病院」は、終章として、「小児科学の誕生と小児病院の歴史」としてまとめられながら、第四章までとは異なった新たな視点が考慮されている。その視点とは子どもの成長・発達であり、これを視野に入れながら執筆されている。小児科学にとって成長・発達は、小児科学分野の最大の特徴でもあり、それだ

けで一書をなすほどの広がりとおもひをもつ。深瀬氏はその一端を「人工栄養法の確立をめざして」、「ヒトの成長についての研究史」、「東と西の育児論」の三つの節でまとめている。特に、ジム・タンナーなどの小児科臨床ではほとんど触れられることもない事績を丹念に読み解かれていることなど、その博覧強記はわれわれ後学の予想を遙かに超える。それとともに、子どもに対する健やかな成長を見守る視線と思いが本章の至る所に感じられる。

以上、本書は全五章により構成されているのであるが、その内容は、医師、そして歴史家の専門的立場から検討がなされているために、詳細な分析過程については歴史的解明の現代的意義との接点が一見すると見出しにくい箇所もないではない。しかしそれにもまして、本書で示された小児科学の発展に寄与する人類の格闘史は、そのおりの小児科医療とその研究に携わった人々の子どもの健康への願いを細部にわたるまで追体験する貴重な経験を提供してくれる。

深瀬氏の長年にわたる小児科学へのまなざしと研究の蓄積が一書となって刊行されたことに深い敬意を払いつつ、本書を手にとられることを強くお薦めしたい。

(七木田文彦)

[思文閣出版、〒606-8203 京都市左京区田中関田町2-7、TEL. 075 (751) 1781、2010年7月、A5判、604頁、9,000円+税]

七木田文彦 著

『健康教育教科「保健科」成立の政策形成

——均質的健康空間の生成——』

本書は、戦後教育改革において制度化された「保健科」の成立過程を、戦前の健康教育運動から説き起こし、戦時中の国民学校令体操科体操における「衛生」を経て、今日の形態に達するまでを連続するものと見て、その経過をたどった論述

である。

今までの通説は、戦後はアメリカ流の占領政策によって、戦前の教育が全面否定され、全く異質の教育理念が持ち込まれたという文脈で理解されていたが、これが戦前期の「健康教育」の伝統を

継承するものであるとしたことである。東京大学大学院の佐藤学教授から「戦前と戦後の連続性と非連続性の考察は教育史研究の中心論題の一つであるが、本書は最も成功した研究の一例であろう」と評価されている。

著者はこの間の経過を一期、二期、三期に分けて考察しているが、第一期は大正から昭和前期にかけて全国的に華々しく展開された健康教育運動の実態を考察する。

わが国の初等教育では、健康教育に属する教科として明治五年の「学制」に「養生」というものがあつたが、これは数年で廃止せられ、以後正規の教科を持たなかつた。それが第一次世界大戦後、国民体位の低下、青年期の結核の蔓延、乳児死亡率の上昇等の事象の改善の気運から、学校関係者の間に、国定教科書にとらわれず、カリキュラムを自主編成して、衛生教育を実践する運動が、全国各地で行なわれた。これは同じ頃アメリカで展開されていた Health education の思想を受容して、これを範としたものであつて、アメリカの健康教育学者ターナーの来日した昭和11年(1936)をピークにして展開された。著者はこの時全国各地の学校で提案実践された「衛生教授訓練要目」220編に及ぶ、膨大な資料を収集してその実態を明らかにしている。

第二期として、昭和16年(1941)国民学校発足にもなつて制定された教科、体練科体操中に採り上げられた「衛生」について考察する。「衛生」の中に含まれた内容は次の三つ「身体の清潔」「皮膚の鍛練」「救急看護」、すなわち衛生訓練的のもののみで、衛生教授的内容は含まれなかつた。これにたいして前期までに展開された健康教育運動の目標や内容から見て後退とするこれまでの論者の見解と異なり、著者はむしろこれを合理的改革として位置付けている。そしてナショナルカリキュラムに位置付けられたことから健康教育教科体制の成立と見て、高く評価を与えている。

従来の見解と大いに異なるところであつて、今後議論を呼ぶことが予想される。

第三期は、戦後の教育改革において健康教育教科「保健科」が制度的に成立した時期として採り上げる。戦後の教育改革は、第一次米国教育使節団の報告書によって決定的な影響を受けた。報告書の Health education に関する内容は、これまでの日本の衛生教育を評して、「健康の教授 Instruction in health は、小学校において重大な欠点があるように思う。実際に、生理についても衛生についても、何も教えられていない」としていた。この評は使節団の一員マックロイによって発せられたもので、彼はアイオワ大学の生理学の教授であつた。マックロイの再度の来日を求めて学校体育研究委員会(第七部に学校衛生之部も設けられた)が編成されたが、結局この委員会が戦後の学校体育の大綱を方向付ける「学校体育指導要綱」の作成を担当するものとなつた。この要綱では「広義体育」の見解が採用され、最終的に「衛生(保健)」と「体育運動」の内容を含んだ合科型教科「保健体育科」の誕生をもたらすこととなつた。

このようにして成立した「保健科」の授業実施率は現実には一向向上してこない。「雨降り保健」といわれて久しい。佐藤教授も「なぜ、健康教育は制度的には国際的にみて先進的であるにもかかわらず、学校教育の実践の現実において宙づり状態になっているのか」との疑問を寄せているが、著者はこの書ではそれに答えていない。しかし佐藤教授からも新たな研究の地平を切り開いたものと賛辞をおくられているので次の論述を期待したい。学校保健史の分野では画期的な論文の出現として歓迎されよう。

(杉浦 守邦)

[学術出版会、〒112-0012 東京都文京区大塚 3-8-2、TEL. 03(3947)9153、2010年11月、A5判、292頁、5,200円+税、発売所：日本図書センター]